澤田さんが作った杉玉。立派に出来ています

FIFAワールドカップの対戦を鳥のエサの減り方で占ったユニークな澤田さんのアイデア

「ひまつぶしが増えています」と話す澤田さん

澤田先生のひまつぶし

平田地区を東西に貫く道沿いを歩いていると、軒先に下げられた杉玉を見つけました。杉玉は「酒柱」ともいわれ、日本酒の熟成度を知らせる縁起物。もしや、酒蔵でもあるのでしょうか。

作者は家の主の澤田久夫さん(71)。「酒は造れませんけど、杉玉がどんな風に出来ているか興味があって作ってみました。単なるひまつぶしです」と笑う澤田さんは、以前は教職に従事していました。「地元の津森小学校が最後の勤務地で幸せでした。ただ、なーんも趣味を持ってなかったので退職後はどうしたもんか、と思っていたんですけど、ひまつぶしに野菜や花を植えたりといろいろ始めたら、どれも面白くなって」と澤田さん。

先のFIFAワールドカップでは、愛猫に勝者を占わせたユニークなシーンを自身のユーチューブにアップして笑いを誘ったそうです。「老人と猫と野菜と花」で検索してみてください。くすっと笑える澤田さんの"ひまつぶし"がアップされています。

懐かしい思い出が蘇る場所

古くから地域の人々の心のよりどころとして親しまれているのが「円万山寿徳寺」です。承応2(1653)年に僧の了賀が開基したとされる、浄土真宗の寺です。

かつて農繁期には、幼い子どもたちを預かる寺保育も行われていました。『60年ほど前にここに通っていた』という門徒さんの話を伺いました。当時、寺ではたくさんのお子さんを預かっていたようです。本堂に布団を敷き昼寝をさせたり、梁にブランコをかけて遊ばせたりしていたようです」と話すのは16代住職の河邉裕司さん(44)です。「寺とは本来、地域の人たちのお役にたてる存在であり、保育園がなかった時代、そうした役割も担っていたのでしょうね」と坊守の梨奈さん(44)も話を添えます。

実は、住職の裕司さんは大阪出身。梨奈さんと京都の仏教系の大学で知り合い結婚し、16年前に妻の実家の寿徳寺を継ぎました。「自然豊かな良いところにご縁ができました。どなたも温かく見守ってくださり、今では自然と益城弁も出るようにもなりました」と裕司さんは優しい笑顔を見せます。

毎年1月には親鸞聖人の御正忌報恩講会、春と秋には彼岸が行われる寿徳寺は、寺参りに集う人たちにとって、幼い頃の甘い思い出が胸に蘇る場所ではないでしょうか。

階段から眺めた寿徳寺の本堂。大きなイチョウが紅葉を迎えていました

かつて子どもたちが遊んだり昼寝をしていた本堂

昭和35年ごろに寿徳寺の寺保育に集まった子どもたち(提供写真)

寿徳寺の住職の裕司さんと坊守の梨奈さん